

## 巻頭によせて



校長 北村 聡

Kitamura Satoshi

文学者の白州正子はその著書「西行」の中で、「人間は孤独に徹したとき、初めて物が見えて来る。人を愛することが出来る。誰が言ったか忘れてしまったが、それはほんとうのことだと思う。」と記しています。

グローバル化の流れは何も今に始まったことではありません。16世紀の大航海時代を起点として、世界の一体化は進みました。そして、18世紀の半ば以降、イギリス植民地の拡大により、パックスブリタニカとよばれる時代を経て英語が今日の地位を築いてきました。

そのこと自体を否定はしませんが、今日では人の移動と情報伝達の手が速く、何事につけても速度と能率が求められ、人々の心の余裕がなくなりました。制度を整え、罰則を決めれば万事うまくいくと考える人が増え、「勝ち組」「負け組」などという言葉が飛び交います。まるで「負け組」には人間としての尊厳すら認めようとする愚かな風潮です。過剰な競争意識による焦りの中で、自分を見失い、人を思いやる心が減ります。こうした日本の大人社会の危機的状況が、若者達の成長にも少なからず悪影響を及ぼし、いじめなどの問題を生じています。

思えばかつて、「バスに乗り遅れるな」と躍起になり、世界情勢を見誤ったことで、日本は戦争に敗れ、様々な禍根を残すことになりました。

全ての人が西行のような隠者になることは出来ませんが、せめて日に一度くらいは「孤独」の内に身を置いて、穏やかな心、人間としての自然な心を取り戻すべく考えるようにしてみても如何でしょうか。